コスモス

62

第 4 次

1989・10

秋山清論特集

終刊号

コスモス第62号（通巻101号）終刊号

秋山清論特集

定価 七〇〇円

秋山清論特集

1989年10月

目次

秋山清と自分のための詩　西杉夫　3
『確信犯的生きざま』について　向井孝　11
『わが暴力考』について　和田英子　14
秋山清の「われをはげます歌」　岡田孝一　17
プロレタリア詩と人民詩精神　吉田欣一　21
発掘三篇　その他　寺島珠雄　25
挽歌　木原実　31
秋山に　小野十三郎　34
秋山清の詩の特性　錦米次郎　36
秋山清と詩のことば　羽生康二　40
庶民性からの脱出　高島洋　43
秋山清の短歌について　坂上清　45
秋山清と乃木希典　千早耿一郎　49
牡蠣と芍薬　村松武司　53
秋山清のやさしさ　藤森節子　57
『恋愛詩集』など　清水清　60
夢二の漂泊　暮尾淳　62
秋山清・著作目録　秋山雁太郎　66

秋山清と自分のための詩

西杉夫

一

いつのころからか秋山清は、詩は自分のために書くものだと強調しはじめた。コスモス同人会などでそんなことを何回かきいたことがある。そのときの感じでは、なぜいまさら、そんなわかりきったことをいうのだろうというのが正直のところだった。そしてそういうふうにいったこともあるが、そこで論議がおきて、新しい展開がみられるといったふうなこともなく終わった。

詩は自分のために書くのだという主張が意味をもつためには、一定の条件を必要とする。つまりこれと反対の意見が、大勢を占めているとか、少なくとも強く存在しているとかいう状況がなければならない。

たとえばそれが、詩をプロレタリア政治革命に従属するものとしたプロレタリア文学の時代に、その内部あるいは周辺でいわれたとしたら、ひとつのきわだった意見＝異見であっただろう。そこまでさかのぼらなくてもいい、戦後の民主主義文学のなかで、詩は民族解放のためでなく、労働者階級のためでなく、まさに自分自身のために書くんだといえば、それとして衝撃力をもったはずだ。

ところがそんな状況はとっくになくなっている。政治的な目的をもって詩を書くグループは残っているにしても、およそ文学的な力をもっているようには思われない。そして一般に売れない詩を書いているのだから、収入を得るためなんていう目的もありえない。だれに強制されるわけでもなく、自分が書きたいから、自分のために詩を書く――もちろん詩を発表することでは他人との関係を意識しているわけだが、書くということでは自分のためというのが大勢だろう。そんなところで、自分のために詩を書くんだと強調することに、どれだけの意味があるかということだ。

これはわたしだけの考えではなかったようで、だから秋山の主張が、はかばかしく受け入れられたとは思われない。そのことで秋山には、いくらかのいらだちがあったようだが、そのくりかえし以上には秋山の方にしてからが、より論理的に、より説得的に、問題を解明していこうとはしなかったのだから、中途半端に終わったのもやむをえないことだった。

こんど秋山の詩や詩論、評論をかなりまとめてよんでみて――その大部分はよみかえしてみてということになるが、詩は自分のために書くものだという主張が、秋山のなかで、たいへん重い意味をもっていることがはっきりした。あれだけしばしばいっていたのだから、秋山にとって気がかりな問題であることはたしかだったが、そのころ感じた以上に重いということであり、さらにはそれは、わたしたち全体の詩にかかわることでもあった。

秋山があれをいいだしたいきさつも、ほぼわかってきたように思う。詩を自分のために書くというのは、ひとつには秋山自身の詩についての深い反省に基づいていた。ここには秋山独自の事情がからんでおり、しかしその独自さは秋山だけの範囲をこえて、普遍性をもちうるようなものであった。

これをいいだしたのはいつごろからだったろうか。

「私が、詩は自分のために書くのだと大雑把にいいはじめてから五、六年にはなる」といったことばが、「わが解説（8）」（『幻野』21号）に見られるが、これは1981年のことである。このとおりだとすると、秋山が自分のための詩をいいだしたのは、75、6年ということになるが、これは正確ではない。71年の『詩入門』ですでに、「詩は自分のために書くものである、また詩は自分のためにだけ書くものである」とはっきりといっている。少なくとも七〇年代以降は、このような考え方に立っていたといえそうだ。そして秋山をこのように考えさせた理由のひとつは、いまいったように秋山自身のかなり深刻な自省だったのである。

秋山の詩で世間的にもっともひろく知られているのは「象のはなし」ではなかろうか。そしてこれを題名とした詩集『象のはなし』が詩集としてはいちばん知られているということになるだろう。ところが秋山は、この詩について、自分のほんとうの思いに立っていないという理由で、否定的ともいえるような感想をつづっているのだ。「わが解説（2）」（『幻野』14号）で、こういっている。

「今から二十数年か前に私はこの詩をこんな風にかいたのである。象の死、それも大きな図体の象がコロサレル、戦争のせいで、ということが痛ましかったからであるが、そうであるならば、その痛ましいというわが思いに立って精いっぱい自分の詩を書けば良かったのである。だがこの長ったらしい詩はどうであろうか。象の死を痛むための詩なら、こんな長ったらしい言葉の綴りは不要ではないか。この詩の三つの部分の第一と第三は象の死をすこしも痛んでいない。何か余計な思惑のために、この詩の前と後の部分は書かれているではないか。」

これはまたかなり痛烈な自己批評ということになる。そして秋山にとっては、ただこの詩「象のはなし」だけではなく、「今わが第一詩集『象のはなし』を見ると大方が反戦であり、平和である。それが安全地帯のうただったのである」というふうに問題はひろがっていく。

この詩にあらわれている傾向、この詩集の主流になっている傾向にたいする根深い反省とからみあいながら、秋山の自分のために書く詩という思考は発想されている。

ところで詩「象のはなし」である。戦争中に象をころしてしまった上野動物園に、戦後、タイやインドから象が送られてきたことから書きはじめているこの詩は、たいへんわかりやすくできており、ここに流れている平和への希求それ自体はだれにも異論のないところで、だからこの詩がひろく受け入れられたことは、たやすく想像がつく。技術的に見ても、秋山にすれば長ったらしいということになるかもしれないが、きたえあげた描写力にささえられているだけに、だらけた感じはない。この材料をこの水準にまでまとめあげるのは、かんたんにまねのできるようなことではなく、そこらにあふれかえっている平和の詩、反戦の詩とは、できがちがうのである。

しかし、ということができる。この詩が書かれた1949年から、三十年近くたってからの秋山の自己批評に、わたしは基本的には同意せざるを得ない。このできのいい平明な啓蒙詩の、そのなめらかな語り口がおおってしまったもの、あるいはとりこぼしてしまったものに、わたしは注目する。民主主義万歳にわきたつこの時期に、戦争をにくみ、平和を喜ぶみんなの気持を代表して詩をかきあげるとき、かんじんな詩人の個有な思いはうすれていかざるをえなかった。うまいという点では、飢えた象のトンキーが死んでいくところなどの、すきのない描写があったとしてもだ。反戦詩人のワクから出ないかぎりは、ほんとうの詩はけっしてはじまらないのである。

「この詩が今私において忸怩たる思いというのは、これまで政治への反対をいい、詩による宣伝煽動の拒否と文学主義を否定して来たのでありながら、「象の死」という事件に気軽く便乗して反戦を語るとき、つい子供向けという油断から、もっともらしい語り口によって、自分の（といってもそれは当時上から下まで常識だった）考えを子供たちに押しつける態のことを敢えてした、そんな詩だったことである」と同じ文章でいっている秋山の意見は、残念ながらそのとおりだ。念のために言っておけば、ここで秋山は子供向けということをいっているが、それはたまたまこの詩がそうだということであって、啓蒙調が詩集全体の主流となっていることが問題だった。

この詩を秋山が、自分の思いを押さえて書いたということではない。それなりの気持をこめて書きあげたことはまちがいあるまい。しかしそのときに自分の思いと判断していたものが、はたしてほんとうに、どこまでも自分の思いであったのかどうか——そこのところを秋山はもういちど問い直してみたのであり、その結果が、そのときの状況に大きく影響され、同調している自分の発見になったのであって、それが詩を質的に弱くしていることがわかった以上は、きびしくたちきることが必要だったのであり、そのために、徹底して自分のための詩を追求することとなったのである。

そういう過程をへてつかみだされた考えだっただけに、はたからはしつこすぎるまでに見えた執着ぶりだった。文学の政治的利用に反対してきたはずの秋山にとって、その政治に自分自身が浸食されたことを知るのは、たまらないことだったろうが、これは秋山だけの問題ではなく、政治と文学、政治と詩といった形で、つねにわたしたちにつきつけられてきた問題だった。さきに秋山の独自と普遍といったのはそういう意味である。

二

詩は自分のために書くものだという秋山清の主張は、もうひとつの面をもっている。それはたんに秋山の反省をあらわしているだけではなく、実績をふまえた自信の表現でもあったのだ。

この主張がひとつには、詩集『象のはなし』の主流となっている詩に対する自省、そしてさらにはそれを準備した、秋山自身の戦後民主主義文学運動のなかでのさまざまな体験からくる苦い思いからきていることはあきらかだが、しかし秋山はそのような系列の詩だけを書いてきたのではなかった。一方では秋山は、詩集『象のはなし』以前に、自分のためといえる詩を書いている。いや詩に即していえば、『象のはなし』にもそういった詩が含まれており、大ざっぱにいって秋山の詩には、自分のためだけではない詩と自分のための詩というふたつの大きな流れがあるととらえることができる。それがそのときどきの社会的文学的状況ともからみあいながら、いずれかが主調となってあらわれているように思われる。

だから秋山にとっては、「象のはなし」的な詩を批判することは、それまでに書いてきた詩のすべてを批判することにはならない。一方では「象のはなし」的な詩を書きもしたけれども、一方ではまた自分のための詩を書いてもきたのであり、そのことをはっきりと認識しながら、その理論づけを一応は志向し

たところから、あのように自分のための詩をいいだしたのだと思う。自信をもっていたといったのはそういう意味だ。

ところで秋山の詩の全体を見わたすとき、そのピークはふたつあったといえる。ひとつは詩集『白い花』の時期、もうひとつは詩集『ある孤独』の時期である。これはことがらをいくらか単純化していっており、これらの詩集の詩がすべてすぐれているわけではないし、逆に詩集『象のはなし』にもおもしろい詩はある。ただ秋山の詩のもっともいい部分が、比較的多く、これらふたつの詩集に含まれていることはたしかだ。その具体的な内容についてはこれからふれることになるが、いままでのべてきたこととの関連でいえば、それらはいずれも秋山にとっての、まさにかけねのない自分の詩だ。つまり秋山の詩のできばえと、自分のために書くという姿勢は、対応する関係にある。自分のためにという思考を徹底して押し進めたとき、詩的にも力をもってくるということだ。そしてこれはもちろん、秋山だけにかぎったことではない。

さて詩集『白い花』について見てみよう。この詩集について秋山は「わが解説（7）」（『幻野』20号）でふれてこういっている。

「ぼくは誰に物いうためでもなく、誰をわが思いにひきずり込むためのものでもなく、自分を慰めるために、あの詩をかいた。よく読んで見てください。一かけらの反戦もうたわれていないのが、その証拠である。力の不足、意見の孤立、情勢を理解する力のなさ、協力し助け合う仲間の無いこと、等々が私の詩を、戦争の下で殆ど無言の如くにされた。しかしただ一ついえることは、私は、私の詩を、私のために書いた。人に語りかけるためなどには書かなかった」

秋山は『白い花』をみずから「その作品はひたすらに見すぼらしかった」ともいっているのだが、以上の引用には、強烈な自負をよみとることができる。狂気のような叫びがみちあふれた戦争中に、ただ自分のために詩を書きつづけたとさりげなくいうのだ。

詩集『白い花』でわたしがいいと思う詩は、「雪」、「送行」、「おやしらず」、「さざんか」、「まひる」などである。いずれも短いこれらの詩は、いささか素朴にすぎるかもしれない。あざやかな技術があるわけではなく、ねりあげられたことばが目につくわけでもない。いずれも独白の調子で、たんたんと書かれている。しかしここには作者にしかありえない思いがみなぎっており、『詩行動』いらいみがいてきた「現実に語らせる」方法によってそれが定着されている。人民的なリアリズムのひとつの達成を見ることができるだろう。

なにしろ状況はひどくわるい。孤立無援。ぎりぎりのところまで追いつめられて、たよるべき主義のひとつもなく、ともに語りあうグループもなく、まさに自分ひとりが立って、その思いをつぶやきつづけるのだ。そんな世の中を生きる以上は、もちろんいささか流されながら、しかしその押し寄せてくるものを見つめる、確固とした人間がいる。そこにひびく声はいくらかかぼそいにしても、まぎれもなく人間の、けっして消えてはしまわない内部からの声である。これらの詩が単調であることを指摘するのはたやすいことだが、そんなことはどうだっていいことだ。

ところがこういった事態は、敗戦によってがらりと変わる。日本が外から解放されることによってわきあがった民主主義の喚声に包まれながら、秋山もまたそれと無縁ではありえなかった。このことが秋山に、「象のはなし」への道を開いたのだが、しかしそのきざしはすでに詩集『白い花』にもあらわれている。自分のために書く姿勢を貫きとおすことが、そうたやすくはない例として、ここにつけ加えておきたい。

詩集『白い花』には、「早春」という同じ題名の詩が七篇おさめられている。時期は、1935年から46年にかけてである。題材になっているのは、当時の秋山の家近くにあった乞食村であり、火葬場へものもらいにいったりしながら、それなりにたくましく生きぬく乞食たちについて、その名まえなどもおりこみながら、いわば友だちづきあいの感じで書きつらねたユニークな詩である。おなじ題材で十年にわたって詩を書くというやり方は、詩人の側の変化をくっきりとあぶりだすという意味でもおもしろい。七篇の詩は同じ調子ではありえないわけだが、わたしがここで注目するのは、さいごの1946年に書かれた「早春」である。戦争中の詩を集めた『白い花』のなかにあって、これは例外的に戦後作ということになるが、同じ「早春」シリーズのひとつで、作った時期も戦争中に近かったので、これに加えたものだろう。

描写的な手法に貫かれた「早春」のうちにあって、その点ではこの詩もさして変わりはない。戦災地のあたりにあらわれた顔なじみの乞食たちをえがいて、それなりにまとまった詩でもある。

しかしわたしはこの詩に、ほかの「早春」とはちがったものを感じる。かつてのように、いわば地つづきで乞食たちと対面している作者はいなくなっている。いぜんとして親しみをこめた調子で呼びかけてはいるのだが、そこにはあきらかな一線を感じる。こちら側にいながら、いかにもおうように、にこやかな笑みを浮かべながら、「おお　君らまだいたか」とよびかけているのだ。

こちら側とは、むろん民主主義の側である。民主主義万歳の大合唱に、秋山が安易に、そして全面的に同調していたとは思わないけれども、またそういうものとまったく切れてはいなかった心情が、ここに微妙に投影しているのではなかろうか。あのころの民主革命的な波は、それほどまでに高かったということだ。戦前、戦中の「早春」が、乞食たちのさまざまな動作を見つめながら、さしてもりあがるでもなく、ぷつんとおわっていて、それだからこそいっそうくっきりと乞食たちの姿を浮かびあがらせたのにたいして、さいごの「早春」には、演説調とでもいうようなものがにじみでてしまっている。

ここから「象の話」までは、さして距離がないといっていい。なにはともあれ自分のための詩を書いてきた時期にすぐ接していながら、こういう要素も秋山の詩にまとわりついていたのであり、そこからひとしきり、政治と妥協的な詩も見られることになる。時代の雰囲気と、秋山も無関係ではありえなかったが、むろんそういうものにいつまでも浸りつづけるほどに崩れた詩人ではなかった。

見せかけの高揚を示した民主主義文学運動は、当然ながらつぎつぎと実体をさらけだしていく。それは秋山にとっては、主に新日本文学会の運動を通してであったと思われるが、本来、自律的でしかありえないはずの文学にたいして、共産党はそのイデオロギーのもとにしばりつけようと意図したわけであり、それによっておこったさまざまな問題にぶつかることによって、秋山は痛い思いをこめて、真実を知っていったわけである。反文学的徒党とのはげしい衝突をくりかえしながら、もはや迷いは秋山からは消えていったといえるだろう。そしてそういうなかから秋山の詩はふたたび文学としての力をとりもどしていく。

このようにして生まれた詩が、すでにのべたように、詩集『白い花』の時期とならんで、

もうひとつのピークを形成するのである。そしてこのふたつを比較していえば、むろんあとの方が、その成熟ぶりからいっても、あるいは量的なことからいっても、秋山の代表的な作品群ということになる。

これらの詩は、詩集では『ある孤独』に多くおさめられているし、詩集『象のはなし』にもいくつか見られる。『白い花』にすでにはっきりあらわれていた自分のための詩が、そのごの民主主義文学運動のわきかえりのなかで停滞せざるをえなかったものの、反文学的政治勢力と鋭く対決するなかで、こんどは思考の裏づけも得ながらよみがえって、開花を迎えたわけだ。

具体的にはそのような詩とは、詩集『ある孤独』におさめられている同じ題名の詩のうち、サブ・タイトルでいえば、「プラタナス」、「緬羊」、「マツヨイグサ」、「ネコ」、「やぶれ鳥」、あるいは「大石原――ある孤独」などといったことになるだろうし、これにつながりのある詩として、詩集『象のはなし』からも、「目ぶたをおろしてください」、「やさしい心」などを加えることができる。

これらは『白い花』で見た詩群と、かけねのない自分のために書いている点で共通している。そして方法的には、共通と差異が両方あらわれている。

共通しているのはその写実性ということである。対象をしっかりと描きだすのは、もう秋山の詩に、すっかり根づいてしまっていて、これは変わりようもない。もののいえない戦争下に生みだされた方法ではあったにしても、そういう事情をこえて、もっとも強く思いを定着するリアリズムの方法として、秋山のものになっているのである。

しかし同時にこれらの詩には、『白い花』のころにはなかった主観の直接的な表現もまたあらわれている。「現実をして語らせる」ことを意図した『詩行動』の時代には、主観的表現が排除され、それからひきつづく『白い花』にも、かなり徹底した写実が貫かれているのだが、長い過程をへて、強固な方法が築かれてしまった秋山にとっては、もうそういうものにもしばられることなく、もっと自由に、気ままにいきたいと考えたとしても、それは自然ということだろう。むろん描写的手法をすて去ったわけではない。そういうものを踏まえながら、しかしそれにこだわることなく、勝手にということだ。長年きたえあげた写実の手法がベースになっているだけに、どんな主観的なことばも、空しくこだまして飛び去っていくようなことはないのである。自分のために書く、自分のためだけに書くという以上は、自分の気持ちの主観的表現は、当然ありうるものだった。

詩集『ある孤独』の冒頭にある、「プラタナス」というサブ・タイトルの詩について、秋山は「わが解説（1）」（『幻野』13号）でこういっている。

「ここでは街路樹を見ながら、それを風景描写しながら、その描写のなかに、主観の色がかなりつよく、濃く、押し出されている。何ということもない街の並木のプラタナスを見ながら、それにその当時の私自身の心情が染めつけられている。プラタナスを描きながら、必ずしもそれを写実的に描かず、わが心情をそれによって語ることに大部分の力がはいっている。」

正確な解説である。1957年の初夏のある日のある切実な怒りを描いたこの詩あたりから、秋山の詩はいっそう多様になり、豊かになっていったといえよう。主観的なことばも自由にとりこみ、自在に表現しながら、リアリズムを実現していった。

こういった実作をふまえ、一定の自信をこめたところから、詩は自分のために書くものだという主張がうちだされたのがもうひとつの面である。自己反省と自己評価の両方から導きだされたこの考えは秋山にとっては、もう動かしようのないほど深く、秋山自身のなかに根ざしていた。

三

詩は自分のために書くものだという、秋山清の詩にかんする考え方の軸となっていることばを手がかりにしながら、秋山の詩を見てきたわけだが、この場合の自分は、現実のなかでどのように位置づけられているといえようか。

自分が政治的なもの、社会的なものから隔絶したところで成立しているのではないことはあきらかである。すでに見たように、『白い花』の自分は、戦争への熱狂に抗するという形で、社会をはっきり意識している。『ある孤独』は、社会と自分との本来あるべきかかわりをぎりぎりにまで追求することによって生じざるをえなかった孤独であった。いずれも社会的なものから逃げたところで自足する優雅な自分ではないのだ。

社会的なものへの秋山の関心が強烈だったことは、たとえば1984年に出された最後の詩集『秋山清自選詩集』からもうかがうことができる。

八十才を記念したこの詩集には、初期からその時点までの詩から、五十篇ほどが選ばれているが、これには「象のはなし」も含まれている。あのように否定的ともとれる自己反省を見せた詩を、なぜ入れたのだろうか。もっとも知られた詩だから、一応入れてみたというわけでもあるまい。

自選するときの基準は、むろんその時点での文学的評価にある。そんなことは百も承知の秋山が、この詩を入れていることは、いささか奇妙ではなかろうか。

これを解くカギは、この詩集のあとがき「自選とともに」にあるように思われる。ここで秋山はこういう。

「現在のプロレタリア詩の問題は、詩の問題としてはもっとも軽んじられているかのようであるが、そうた易く扱われていること自体に問題があり、将来に向けて私などはそのことを重く考えようとしている。

戦後ずーっと、ニッポンの詩の問題とは、詩の諸問題の中の、詩の表現ということのみの問題であった。表現の諸問題が、表現のみの諸問題にすっかり置きかえられたために、われわれの周辺の詩は、遊びの詩にその全精力が転移されてしまった、かの感がある。」

秋山のなかにどっかりと根を下ろしている詩の社会性、思想性の重さを感じさせることばといえる。「象のはなし」を自選詩集に入れているのは、これとかかわりがあるだろう。「象のはなし」に秋山が強い批判をもっていたことはすでにふれたとおりだが、それは啓蒙におおわれることで自分が弱まっていくことにたいしてであって、あそこにある平和への姿勢自体は、つねに秋山のものだった。不満と愛着――そのゆれのあいだから、「象のはなし」は選ばれることになったのであろう。

詩は自分のためにと秋山はいうが、問題はこの自分の中味である。どんな自分であってもかまわない、ただそれぞれが勝手気ままに書きさえすればいいと考えていたわけではない。だとすれば、詩は自分のためといった以上は、ではどういう自分かについて、秋山自身があきらかにしていかなければならなかったはずだ。経験したことをじっくりとかみしめながら問題を引きだすことには長けていた

わりには、その引きだされたものの論理化にはあまり熱心でないように思われる秋山は、この場合も系統的な追求は行なっていないが、しかし自分のためにというその自分についてのイメージはもっていた。

秋山にとっての自分は、すでにのべたように、社会的、政治的思考と離れたところにあったのではない。そういうものと深くかかわりながら、なおかつ詩のなかの自分は、自由でなければならないということであり、また社会的なものを拒絶するところには、ほんとうの自由はありえないということでもあったろう。支配体制、支配権力と基本的に対立する自分、そしてそういう支配体制に反対する側にも同じように存在する権力志向にたいして、同じように基本的に対立する自分――そのような自分を貫きとおすところに、秋山は詩のコースを設定した。自分のための詩とは、反権力的な自由と自律の詩ということになる。『秋山清自選集』で、自分の詩を見る秋山の目はほぼ正確である。すぐれた詩はだいたい含まれている。そして同時に「象のはなし」及びそれに近い詩も入っているのだが、ここに社会的なものにたいする秋山の執着があらわれている。それはまたいまの詩の世界への強い反撥とも重なるものであった。あまりの平穏無事、それぞれが小さな世界にとじこもって、心理をのぞきこみ、そのあやをつづる傾向への強い反感だ。

秋山は自分のための詩という考えを十分に論理化してはいないわけだが、たとえば『コスモス』第四次第十号の「『人間』の不足について」では、つぎのような結論をのべている。

「一つは、自由の不足の問題である。政治、権力、団体、居住、イデオロギー等々からの自由。われわれは連帯を叫んできたが、今その連帯の環を大きくひろげて、その内側での自由の内容を厚くし、もっともっとわがままにする、それほどの自由。

二つには、人間の個の解放。わがイデオロギーからの自我の解放。」

秋山はふたつに分けていっているが、まとめていえば思いっきり自由な自分というであろう。そしてその自分とのかかわりで、連帯という発想が出てくるところに、秋山らしさがある。

この先には、それではほんとうの自由とはなにかという問題が出てくる。わたしたちは権力の網の目のなかで生きている。自分としてはまったく自由に判断しているつもりでも、権力のメディアは巧妙に、緻密にわたしたちに働きかけてくる。だから自分のなかの権力も含めたいっさいの権力との明確な対決のないところでは、ほんとうに自由な自分などはありえない。

わたしの見たかぎりでは、秋山はこのあたりを掘り下げてはいないようだが、はっきりいえるのは、自分のための詩のその自分は、人民の中の自分を意味していたことだ。社会的なものから離れてかこいこんだ自分ではなかった。人民としての連帯のなかにいたいと秋山は思っていた。しかしその連帯のなかで、秋山はあくまで自由な個人であり、その立場から自由をうたいつづけようとしていたのであろう。そして事実、その方向での長い詩的歩みを重ねたのだ。

現実を変革することは、秋山にとって変わることのない夢であったし、それを夢見る自分の詩を書きたいと思っていたのであり、その点では人民の詩人といっていい。そのことを秋山はさいごの詩集のあとがきで、プロレタリア詩の問題をもっと重視すべきだといいい方で明記したのである。